

9歳から55年にわたって洞窟のガイドを続けてきた男性が島根県にいる。同県自然観察指導員の門脇和也さん(65)。松江市八束町の国指定天然記念物「竜溪洞」で、年間約2千人を一人で案内してきた。ひげをたくわえた風貌や豊富な知識から「洞窟の仙人」「洞窟の番人」と親しまれている。

(坂田弘幸、写真も)

りゅうけいどう

島根・竜溪洞 案内続け55年

父親に代わり

「火山灰が積もった場所を見れば、火山が噴火した季節もわかる」。竜溪洞の入り口前で、門脇さんが地層を指さしながら説明してくれた。

竜溪洞は、県東部の中海に浮かぶ大根島のほぼ中央にある。約20万年前の火山の噴火で誕生したといわれる火山島で、地下には溶岩

が流れた跡の溶岩洞窟が縦横無尽につながっており、その一つが竜溪洞だ。昭和8年の道路工事で見つかり、龍神様のすみかになぞらえ、その名が付いた。

門脇さんが竜溪洞でガイドをするようになったのは、10歳の誕生日の前日。もともと案内をしていた父親から「代わりに行つてこい」と命じられたのがきっかけだったという。

「当時、島外から来た人を案内する場所といえば洞窟だった。小学4年生で少し知識はなかったが、地元の人間なので知っていることもあった」。1回限りのつもりだったが、父親から「3年たてば身になる」といわれ、その後も半世紀以上、ボランティアでガイドを続けてきた。



竜溪洞の入り口を案内する門脇和也さん。10歳の誕生日前日からガイドを務めている。＝いずれも松江市八束町

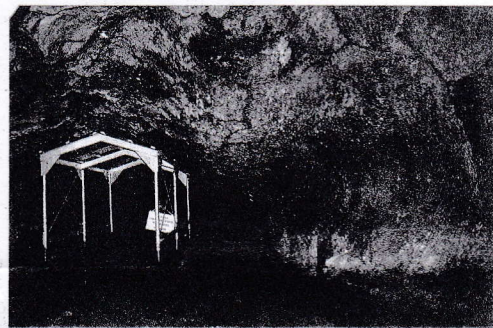
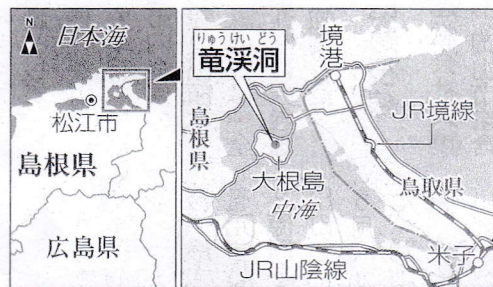
洞窟の仙人 後継探し

「貴重な遺産 後世に」

「普通は山頂にある火口を、ここでは洞窟内で見ることができる」。門脇さんの案内で竜溪洞に入ると、右手に「神溜り」と呼ばれる火口跡が見えてくる。奥行き約80メートルの洞窟内には溶岩が流れた跡が随所に残り、付着した溶岩が固まった「つらら石」も見ることが出来る。

希少な生物

「『何だろう?』という見学者の疑問に答えることにやりがいを感じる」と話す門脇さん。これまでに案内した人は約10万人。海外からの見学者も多く、フランス語や中国語など独学で7カ国語を習得し、各言語版のパンフレットを作成した。



溶岩流出の跡が残る竜溪洞の内部

負担大きく

竜溪洞の内部は年間を通して気温が約15度、湿度は90%以上。真夏には地上との気温差が20度以上になることもある。門脇さんは多い時で1日100回以上上洞窟を出入りするため、体温調整がうまくいかずに度々体調を崩す。平成12年10月の鳥取県西部地震では洞窟内で看板の設置作業中に石が落ちてきて、肩の骨を折るけがをした。

「洞窟案内は命がけ。自分以外に同じ思いをさせたくない」との思いで一人で活動を続けてきたが、門脇さんも年齢を重ね、「このままでは竜溪洞の価値を伝える人間がいなくなる」。還暦を過ぎて後継者へのバトンタッチを強く意識するようになった。

4月にはそれまで無料だった案内料を高校生以上は200円にした。後継者がガイドを続けやすいようにするため。一人で活動するのは負担が大きく、数人が交代で案内する態勢を模索しており、見学会を開いてガイドのなり手を募ることも考えているという。門脇さんは「竜溪洞は未来に残したい遺産。後継者を探し、ガイドを持続させたい」と話している。